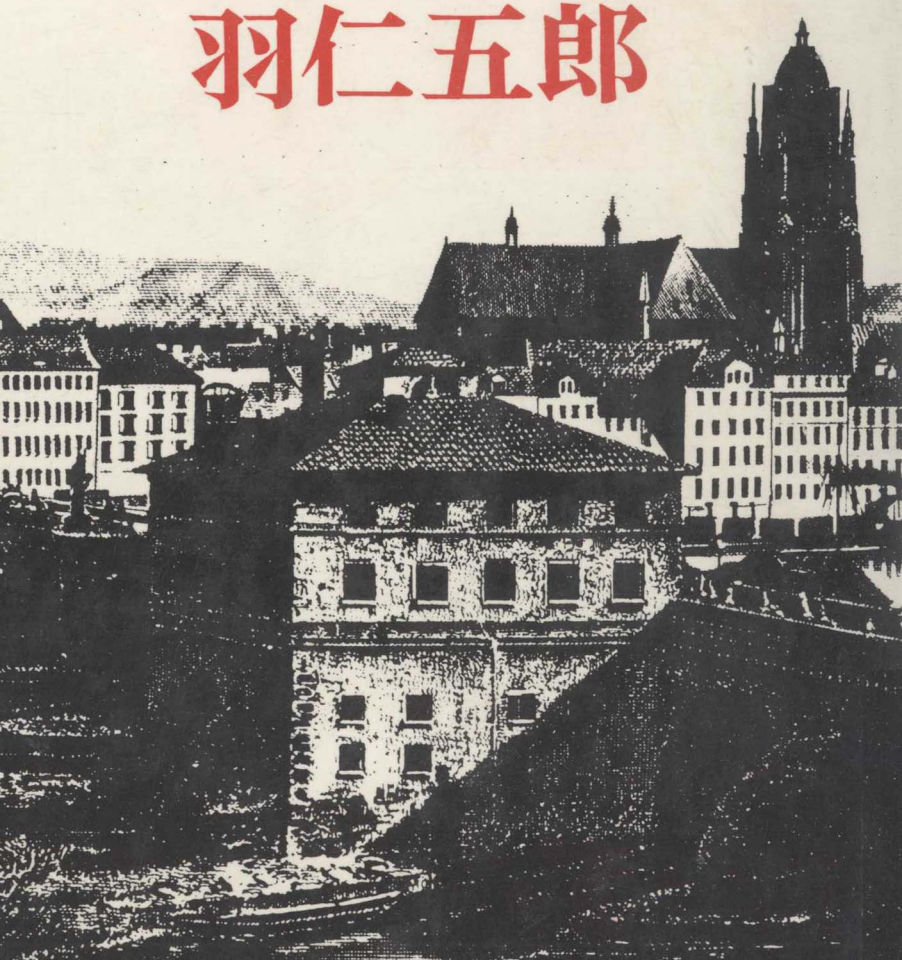
続 都市の論理

羽仁五郎



羽仁五郎

1901年　桐生市に生まれる
　　東大，ハイデルベルグ大学に学ぶ
1927年　日本大学史学科教授
1947年　参議院議員に当選
1948年　日本学術会議，学問・思想・自由保障常任委員長
歴史家
主著『羽仁五郎歴史論著作集』全四巻（青木書店）
　『ミケルアンヂェロ』『明治維新』『都市』
　『日本人民の歴史』（岩波新書）
　『都市の論理』（勁草書房）
　『自伝的戦後史』（講談社）

武谷三男　物理学者
星野芳郎　技術評論家
近藤完一　宮城教育大教授

続・都市の論理　定価 1,400 円

1979年1月10日初版発行
1979年1月25日2刷発行
1979年2月10日3刷発行　著　者　羽仁五郎©
1979年4月20日4刷発行　発行者　高橋　昇

発行所　株式会社技術と人間
〒162　東京都新宿区水道町52番地
電　話 03-260-9321
振替東京 7-192694

印刷・製本　中央精版印刷株式会社

0036-104002-1504

羽仁五郎

続・都市の論理

社会主義をどう考えるか

本書の刊行にあたって

一九七七年五月十二日、武谷三男氏の『現代論集』全七巻の完結を機会に、学士会館で「武谷三男の友人の会」がひらかれた。筆者はその会の司会をつとめたのであるが、席上で羽仁五郎先生にお会いし、現在の歴史的時点について、二、三おたずねした。追ってお宅にうかがいたいと申しあげたところ、結構ですというご返事で、それからしばらくして電話で、まず中国社会主義の問題について教えていただきたく、ご都合をうかがうと、東京に出て行く用事があるから、その折にということになった。東京でせっかくお話しをうかがうなら、テープで記録させていただこうというわけで、『技術と人間』を編集している高橋昇氏に協力を頼み、さらに雑誌に掲載をさせていただくことになった。その日は六月十七日で、羽仁先生は当日、新宿駅前で革新自由連合を応援する選挙演説をされた後、私たちの質問に答えて、ていねいに話された。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

お答えは長時間に及んだが、話せどつきぬということになり、ではもう一回、まだ終りません、それではもう一度と、けっきょく四回、お話しをうかがうことになった。そのつど『技術と人間』の一九七七年九月号、七八年一月号、七月号、十月号に掲載されたが、すでに相当の分量に達したので、ここらで、ひとまず一冊の本にまとめようと、本書の刊行に至ったものである。

社会主義は誕生してから、すでに六〇年余りを経過したとは言え、依然として未知の社会である。社会法則にふりまわされていた人類が、社会法則を駆使しつつ新しい社会をつくるとは、どういうことなのか。これが聞き手の筆者の素朴な疑問であり、このような原理的な質問に答えていただける人は、羽仁五郎先生を措いてはないと思わざるをえないので、ここに、現代史を切る基本的な視点からする、社会主義の未来についての羽仁先生の論述を刊行できることを、読者とともに喜びたい。

羽仁先生の論理の展開は、ちょうど一〇年前に出版した『都市の論理』の次の発展を示すものとなり、先生のご希望によって、本書の題名は『続・都市の論理』とされた。現代社会主義は、暗中模索をつづけているかに見えるが、人びとはもう一度、歴史学の基本に立ち戻り、人民の立場に立って、社会主義の未来を見定める必要がありそうである。そのような視点に立つならば、社会主義の問題は、即現在のわれわれの問題でもあるということが理解されよう。羽仁先生は、本書において、日本の政治の未来をも論じておられるのである。

羽仁先生への質問については、筆者のみならず、武谷三男氏、近藤完一氏、高橋昇氏などにもお願いしたが、そのご協力にお礼を申し述べたい。また、出版に当っては、『技術と人間』編集部の方々に大変お世話になった。謝意を表したい。なお、巻末の人名、事項解説の大部分は筆者の作製によるものである。

一九七八年十一月二十一日

星野　芳郎

目次

本書の刊行にあたって　3

第Ⅰ章　社会主義はなぜ魅力を失ったか……11

なぜ社会主義を問題にするか・13　社会主義と大衆運動・16　管理と大プラント導入の問題点・19　環境破壊をどう捉えるか・23　社会主義に未来はあるか・25　建設途上にある社会主義の理論・31　独占資本主義と社会主義・34　官僚主義を阻止するみち・38　都市自治体の論理の重要性・43　工業化をめぐる諸問題・48　中国の巨大技術導入への疑問・53　官僚主義への歯止めとなる文革の経験・56　戦略としての二本足の工業建設・58　オートメーションと社会主義・64　過渡期のファシズムと社会主義・70　多国籍化する闘争形態・74　閉塞する社会主義文化を超える道・76

第Ⅱ章　社会主義にとって近代化とは何か……79

〝文革〟から〝近代化〟へ・81　中国の近代化と日本の反応

・84　混乱する社会主義陣営・88　〝大学は甦るか〟をめぐって・91　なぜ混乱が起こっているのか・94　共産主義社会の労働・98　労働の疎外から脱却する道・102　いろいろな「近代化」論・106　「近代化」のメルクマールは何か・109　農民解放と都市自治体・112　農民解放の内容・117　「農村の都市化」とは何か・121　〝下放〟の意味・125　近代化と現代化・128　アジテーションとしての学問・132　永久革命の論理は都市の論理・137　バリケードの中の発想・140　最後の国家形態としての都市自治体連合・144　ハイジャックが示すもの・149　現代階級闘争の主戦場としてのゲリラ・152　現代の止揚―近代化へ・155

第Ⅱ章　闘いとしての都市の論理……161

一国社会主義と社会主義国家間の対立・163　中ソ論争のレベル・165　一国社会主義の軍事生産力と官僚主義・169　学問・芸術の革命の必要性・173　思想闘争と生産力・175　従来の技術を超える論理・179　ソ連の教育方法への疑問・183　軍事的、戒厳令的社会主義・187　市民革命と社会主義革命の連関・191　国際的独占資本の結合のうごき・195　両体制にひろがる混合形態・198　階級闘争は独占資本の段階で人権闘争に・202　生

産関係の分析の重要性・206　闘いとしての「都市の論理」・210　〝考える〟ことと〝あきらめる〟こと・214　生産様式の経済学＝ブルジョア経済学・217　独占資本主義の最終段階としての現在・220

第Ⅳ章　社会主義の論理・都市の論理……225

「社会主義」を固定的にとらえるな・227　定説・秀才・官僚・233　革新政党の官僚化・238　未知への挑戦の魅力・241　四つの近代化への危惧・245　社会主義の新段階における問題点・248　パリ・コンミューンの教訓・252　都市自治体と中央集権・255　社会主義国の変質はなぜ起こったか・259　画一的高度テクノロジー社会の危険・263　人民公社の意義・265　集団と個人・270　政治参加の意味・273　都市の論理の実践・275　社会主義国と民族主義・ナショナリズム・278　社会主義建設過程での陥穽・282　人民の判断に立て・286

補章　人名・事項解説……293

装幀・田村義也

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第Ⅰ章　社会主義はなぜ魅力を失ったか

なぜ社会主義を問題にするか

星野　今日お伺いしたいことは、社会主義の問題なのですが……。私は一〇年前に読売新聞の特派記者のひとりとして、文化大革命のさなかの中国へいったのですが、そのときはじめて、社会主義から共産主義への移行の道筋のようなものが分かったという気がしたのです。

何故かといいますと、社会主義にはどうしても官僚主義がでてくる。企業間競争はないし、労働者は首を切られる心配もないし、企業がつぶれる心配もない。

ひじょうに立派な人間ができてしまえば問題はないのだが、それができるためにはどうするかが難問です。なぜ労働者が権力をとれるかというと、マルクスやエンゲルスがいっているように、革命をつうじて労働者が力量をたかめるからなのですが、社会主義から共産主義への移行にさいしては、労働者階級はどういう過程で自分の力量をたかめてゆくのか。単に生産力が人民的所有になったとか、失業とか老後の心配がないということだけではなくて、そこには何か〝たたかい〟がなくてはならない。闘いがなければ人間が変わるはずがない。むしろ官僚化が進んで、場合によっては資本主義下で闘う人民よりも劣るという状態にさえなりかねないと思っていましたが、一〇年前の中国旅行で、目をひらかれた思いがあって感動したのです。

羽仁　最初に行かれたのは、文化大革命のはじまった年ですか、その翌年ですか。

星野　一九六六年の十二月から一九六七年の一月にかけてです。文化大革命が、学生の運動から労働者の運動にきりかわる境目のときです。「人民日報」が、労働者が文化大革命の担い手となるべきだと呼びかけたのが、たしか十二月ですが、私の行ったときには、紅衛兵は後に退いていて、労働者が前面にでていました。そのとき、社会主義のなかにうまれる官僚は、共産党のなかにでてくるのだということがはじめて分かった。私はその点がよくわからなくて、〝敵は民族資本家ですか〟ときいたんですが、〝いや最大の敵は、党内実権派なのだ〟と強調するのです。事実、中央、地方を問わず、猛烈に批判されているのは、共産党の幹部でした。社会主義の官僚化とは、共産党そのものが官僚化することであり、そこが官僚化すれば、すべてがおかしくなるのだということが分かった。それを防ぐためには、党内の闘いだけでなく、人民大衆と力を合わせて党内実権派をたたくのだというふうに、文革をうけとったのです。そしてこれがなければ社会主義は駄目なのだと感じました。

そして一〇年後の昨年、中国科学技術協会の招待で中国を訪問したのですが、ちょうど四人組事件の直後で、文化大革命当時とはちがった雰囲気を感じました。それは、以前の文化大革命は自然発生的ともいえるような下からのうごきだったのに対して、今度の四人組粉砕は、上からの行政的措置をすすめてしまってからキャンペーンをうっているという感じですね。ですから、壁新聞をみても、前回にくらべるとかなり画一的な側面がある。

それから漫画がひじょうに多い。漫画も結構ですが、ゴシップ的な扱いになっていたのが気

になりました。なにか、割合短期間に中央政権の意向がとおってしまうという、上からの運動という感じですね。文化大革命のときは、勝つか負けるかわからないツバぜり合いでしたが、今度の場合は、勝ち負けははじめからわかっていて、一気に処理されてしまった。私は、そういうことで、社会主義はこれから果たしてうまくゆくのだろうかと思ったわけです。

かねてからの疑問なのですが、社会主義とファシズムは紙一重なのではあるまいかと改めて感じました。共産党が官僚化して変質した場合には歯止めがきかない。鉄の規律があり、軍隊があるのですから、路線がいったん間違って出発してしまうとキリがなくなって、行くところまで行くのではないか。

社会主義では、生産手段は人民の所有だといったところで、官僚には実際上の管理権はある。資本主義でも独占がすすめばすすむほどお雇い重役が巨大な生産手段の管理権をもつようになる。この点はあまりかわらないような気もします。

今度の旅行では、中国のよい側面をたくさんみましたし、感動もしましたが、社会主義にはむずかしい問題があるなということをつよく感じました。

「社会主義とファシズムは紙一重」などという表現は、社会主義と全体主義を同一視するものだという批判をうけそうですし、自分でもおっかなびっくりな表現なのですが、何かそう思わざるをえないような感じがしたのです。

羽仁　中国に招待されてご馳走になってきてこういうことをいうのは、なかなか勇気がいる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.